

『Y&T（ワイアンドティ）研究所』設立趣旨

You are the Hope for Tomorrow.

1972年に「ローマクラブ」が発表した「成長の限界 **The Limits to Growth**」は、経済成長と人口成長に関する新しい視点を全世界に提起しました。

爾来42年、私たちが暮らす日本は、1960年代の高度経済成長、1980年代の高度消費社会を経て、21世紀の現在、人類の歴史上に類を見ない、前例無き「超少子・超高齢」社会ニッポンに直面しています。

「人類の進歩と調和」を掲げ、日本で最初の万国博覧会が開催された1970年の翌年、小林陽太郎氏が率いる富士ゼロックスの「モーレツからビューティフルへ」、電通の藤岡和賀夫氏が企画した「ディスカバー・ジャパン」が展開されます。それは、「成長から成熟へ」と歩み出すべき、とのメッセージでした。

1980年に「文藝賞」を受賞し、翌年に「なんとなく、クリスタル」を上梓した田中康夫が拙くも唱えてきたのも、「量の拡大から質の充実へ」です。

表層的に捉えれば、世界も日本も金融資本主義へと移行する中で、「市場では数値に換算出来ない」社会や家族の人間関係や文化・伝統は「価値ゼロ」と見做す流れの中にあります。が、であればこそ私たちは今、性別や年齢、職業や肩書に関係なく、誰もが一人の消費者であるとの視点に立って、都会の不満 VS 地方の不安、若者 VS 老人、正規 VS 非正規、官 VS 民、保守 VS 革新といった不毛な二項対立を超えた「成熟の追求」を実現すべきなのです。

それこそは、「ローマクラブ」が憂慮した「成長の限界」という「黄昏＝誰そ彼＝日没」の不安を、「夜明け＝彼は誰＝日出」の希望へ転換し得る選択です。

供給側の都合で無く、消費側の希望に根差した社会のあり方。

空理空論な“大文字”の大言壮語でなく、地に足の付いた“小文字”から始まる経済のあり方、文化のあり方、社会のあり方。

四角四面でない“理に叶った”提言こそは、私利私欲でない“利に適った”幸福を我等に齎します。

それは、やわな「第三の道」とは異なります。ユナイテッド・インディヴィジュアルズの“心意気”に基づく、位相を変えた「適格な認識・迅速な決断と行動・明確な責任」を伴った提言を行う“触媒としての装置”。

日本の為の、人間の為の「21世紀のローマクラブ」なのです。

You are the Hope for Tomorrow. Y&T 研究所

『Y&T（ワイアンドティ）研究所』設立に関する若干の補足

職場や家庭や地域で、あるいは医師会や青年会議所を始めとする各種の団体やサークルに、本来は純粋な想いで参加し、行動しているのに、ふと気付いたら、前例を踏襲する組織の論理に翻弄されている自分に戸惑い、かといって、声高に拳を振り上げる左右の「イデオロギー」的言説にも馴染めず、もどかしい日々を過ごしているのが、小生を含めた大半の方々かと思います。

嘗て作家の城山三郎氏は、所属する組織や居住する場所に関係なく、“無所属の時間”を生きる自分を保とう、と説きました。

全国津々浦々で真っ当に働き・学び・暮らす皆さまを無料会員の形で広く募り、職業や地域、性別や年齢、肩書といった従来の layer＝階層を超えた横串のネットワークを提供するプラットフォーム。それが『Y&T研究所』です。

YはYou（あなた）、TはTomorrow（明日への希望）を表します。元西武百貨店社長の水野誠一氏を顧問に迎え、You are the Hope for Tomorrow. を合い言葉に、「イデオロギー」とは無縁の新しいムーブメントを、真に成熟した社会の構築へ向けて、まずは国内の各地で構築してまいります。

超少子・超高齢社会に直面するニッポンは今、黄昏時（たそがれどき）だと捉えられがちです。でも、古文の授業で習ったように、その昔は薄明るい光を放つ朝方と夕方の両方を「彼は誰時（かわたれどき）」と呼んでいました。

目の前の、誰だか判然としない相手は一体、誰だろう、と五感を働かせる時間帯という意味合いです。

実際、夕焼けの名残の赤みは、夜明けの感じとも似ています。

たまたま西の空に広がるから、もの哀しく思えてしまいましたが、時間も方角も判らぬまま、ずうっと目隠しされていたのをパッと外されたら、わあっ、東の空が明るくなってきた、と良い意味で私たちは錯覚するかも知れません。

「微力だけど、無力じゃない」。私たち一人ひとりが持っている力は「微力」です。けれども、決して「無力」なわけではありません。

“ささやかだけど、たしかなこと”を一つひとつ。できる時に、できる事を、できる所で、できる人と一緒に、できる限り。

単なる空威張りとは無縁の、しなやかな矜持（きょうじ）と諦観（ていかん）を併せ持ったニッポンの日の出を再び！

『Y&T研究所』の願いです。 さあ、あなたも一緒に。